

自由南アフリカの声

1998年5月

No.17

Voice of Free South Africa

発行 アジア・アフリカと共に歩む会

Published by Together with Africa

and Asia Association(TAA)

1998年5月の報告と予定

- 1998年2月浦和市にて報告会と写真展示
- 4月ELETへ2713冊送る
- 5月MEIへ6486冊送る
- ハウテン州へ送付予定の車を保管中。

目次

南ア副大統領夫人Mrs. Mbekiを囲んで	2
平林薫さんの南アだより	3
新聞記事(アビイヴイングニュース、毎日新聞)	4
南アフリカで大歓迎の中古BM	6
ドミサニさんを悼む	8
1997年度決算書	8



南ア、ハウテン州教育局へ送付する予定の移動図書館 ……浦和市にて



来日中のムベキ副大統領夫人

南ア副大統領夫人“Mrs. Mbeki”を囲んで

久我 祐子

4月9日に来日中の南アフリカ副大統領タボ・ムベキ氏が国連大学で講演を行い、当会からは野田千香子、浅見克則、久我祐子の4人が出席した。「アフリカン・ルネッサンス」という題のその講演内容は、南アフリカだけでなくアフリカ大陸諸国全体の再生を唱ったものだった。従来西側への依存体制から脱却し、貧困、飢餓、累積債務、内部闘争などいまだ多くの問題を抱えるアフリカ大陸を自らの手で再生していき、同時にアフリカの伝統や文化を再認識していこうという前向きな力強い内容だった。ムベキ氏の講演のあと、NGO関係者はムベキ夫人を囲んでの短いお茶会をした。旧黒人居住区ソエトの貧困地域で育ったというムベキ夫人は、長年NGO活動に身を投じてきた方で、副大統領夫人になった今でも精力的に活動を続けておられる。そんな夫人は、来日中に是非南アに携わる日本のNGO関係者と会いたかったそうだ。

各NGOの自己紹介がひととおり終わると、熱心に聞いていたムベキ夫人は、南アにおけるNGO活動の重要性や問題点を次のように話してくれた。

・南アでは都会と地方の格差が著しい。対外的には、例えば他のアフリカ諸国に対して積極的に投資を行っている南ア経済だが、国内の遠隔地への投資は滞っており、地方の開発は非常に遅れている。そのような地域でのNGOの役割は今後も非常に大きい。

・海外からの援助機関やNGOが南アでプロジェクトをしていく上で注意すべき点は、自分たちがそこを引き上げた後も、プロジェクトが継続していくようにプロジェクトを地元で根付かせることだ。それには、地元の住民やNGOを積極的に参加させ、プロジェクトを運

行していく能力を育てていく必要がある。国際NGOが去った後、プロジェクトが停止し、地元にはなにも残らないというケースがしばしばある。

・地元のニーズは地元の住民やNGOが一番よく知っている。しかし、南アのNGOと国際NGOが協力していく場合国際NGOの発言の方が強い場合がよくある。南アのNGOは、海外のNGOからのプロジェクトの提案を鵜呑みにするのではなく、自分たちが必要としているプロジェクトを進めていくべきだ。逆に、海外のNGOは、地元のニーズにもっと耳を傾けるべきだ。

・今後の南アの健全な発展に一番大切なのは人的資源なので、国民の教育レベルを上げることは急務である。日本のNGOのなかに、英語や移動図書館車を送るなど、教育に関するNGOがいくつかあることを知りとても嬉しく思う。

どちらかという小柄なムベキ夫人は、大きなジェスチャーもなく終始落ち着いて淡々としかし力強く語ってくれた。経験に裏付けられた基礎のしっかりした人、そんな印象を持たせる安定感のあるすてきな方だった。

◆ムベキ副大統領は来年の総選挙後マンデラ氏の後を継いで大統領に就任が確実視されている。



ムベキ副大統領夫人とNGOとのミーティング …………… 国連大学にて

平林さんの南アだより (1)

平林さんはANC東京事務所のスタッフでした。現在は南ア、ジョハネスバーグの旅行会社に勤務しています。ジョハネスに住む平林さんからのいきいきとした情報をお伝えしましょう。

くるま社会

この国は公共の乗り物に頼ることができません。バスは一部のエリアしか網羅しておらずまたいつくるかわかりません。電車もあるにはあるのですが、限られた地域のみです。実際、ジョハネスバーグからプレトリアまで電車に乗ったことがあるのですが、途中意味もなく止まったりして(アナウンスもない)片道2時間以上かかってしまいました。線路は金鉱をぬうようにして走っており、ぼた山があちこちに見えます。

とにかく公共の乗り物で移動しようとしたら一日がかりになってしまいます。というわけでこの国では車を持たないとどうにも動きがとれないのです。でも、これだけ多くの人々が車を利用するということはもちろん渋滞も起きます。ラッシュアワーは東京並みでハイウェイで動きがとれなくなってしまうほどです。生活必需品のわりには車の値段が高く新車は一般人にはとうてい手が出ません。こちらでは”新車か家か”という選択がなされるのです。ですから何十年前の日本では化石となっているモデルの車が今でも走っています。そして、ハイウェイの片隅で困った顔をしてボンネットを開けている人をひんばん見かけます。この国では日本車に対する信頼度が高く、特に乗り合いタクシーはトヨタのハ

イエースと決まっているようです。“くるま”と言えばズールー語でクルマは“話す”という意味です。人々は道端でお店でシャベーン(酒場)で大声でクルマしています。本当にここはくるま社会なのです。

モンスター退治

ジョハネスバーグは大都市なので、あまりアフリカにいるという実感がわきません。ただ私のフラットのまわりは緑が多くいながらバードウォッチングが楽しめます。フラットの庭にはさぎのような鳥がゆうゆうと歩いているかと思うと黄色やオレンジのかわいい小鳥が木々を飛び回っています。朝は鳥の声で目を覚まします。(東京にいた時はカラスの声で目を覚ましていたっけ)

でもこれが車で4、5時間北に上がると”カバン注意”の看板が出てきたり、ワニに噛まれただの、家畜がチーターに襲われただのといった話が絶えず、やはりここはアフリカなのだ実感します。何年か前にはクルーガ国立公園内をドライブしていたチャイニーズのカップルがライオンにアタックされて死亡するという事故もありました。自然の中の野性動物だということをすっかり忘れてしまったのでしょうか。最近ではモザンビークからの不法移住者たちが国立公園内を通過する際にライオンに襲われるケースが増えています。怖い話ですが、ライオンも一度人間の味を覚えてしまうと、マンハントをするようになるのだそうです。でもとりあえず、ライオンやチーターなら話はわかるのですが、最近奇妙なニュースがありました。東ケープ州(以前のトランスカイ)のある川に半分魚で半分馬の形をした大型の珍獣が住んでいて、近寄る人間をかみ殺すというのです。実際に何人か殺されていて父親を亡くした少年の証言もありました。川の周辺に住む人々は恐怖におののき、警察に早くこの珍獣を退治してほしいと訴えているのです。この国の警察は増加する強盗、カーハイジャック等に対処するのにおおわらわですが、おまけにモンスター退治とは大変です。



左より 久我祐子、南アのソゾ外相、平林薫、野田千香子

南アフリカで大歓迎の中古BM

「図書館雑誌」 1998.4号掲載より

野田千香子

この6年の間に小さな市民グループである「アジア・アフリカと共に歩む会」(TAAA)が南アフリカ共和国の黒人の多く暮らす地域へ送ってきた中古の英語の本は約12万冊、また中古移動図書館車は7台になった。そして現在も数千冊の本が90個のダンボールにパッキングされ、物置で次の船を待機している。最近廃車となった埼玉県浦和市の移動図書館車も南アでの再利用に備えて自動車工場で再整備中である。1年に1~3台の移動図書館車と2~3万冊の英語の本の送付のペースがこの数年続いていて、今後数年間もほぼこのペースで送り続けていける見通しである。

●南アと日本の関係

過去における日本と南アフリカ共和国の関係には見過ごすことのできない影がある。数10年続いた南アの人種隔離政策アパルトヘイトが世界中の非難的となっていた1980年代の半ばに、国連は南アに対する経済制裁を決定した。しかしこの年、日本は2年連続して世界一の対南ア貿易国となったのであった。アメリカや北欧などで南ア製品の不買運動が盛り上がっていた時、日本では一部の人々を除いて多くが無関心であり、政治家の中には南アとの友好関係を結ぶ者さえあったのである。

1994年に黒人初参加の選挙でANCの新政権が誕生した南アフリカは、黒人も白人もその他の人々も平等な政治的権利を得たとはいえ、アパルトヘイト時代に占有された白人の経済的権利はそのまま継続されている。これは教育の分野にも言えることで、白人の多い学校は設備や教育内容が充実していて、反対に黒人地域の多くの学校は校舎も設備も極端に貧しい。倉庫や教会の礼拝堂を借りて、一つの部屋にぎっしり何クラスも入っていることもある。黒人が白人たちとほぼ同程度の

教育を受け、職業に就ける能力を持って初めて平等な権利を得たといえることができるのである。アパルトヘイトの遺したものはあまりに大きく根が深く、人種間の平等の実現には長い年月がかかりそうであるが、日本人として少しずつでも応援していきたいと思っている。

●TAAAの出発から移動図書館送付まで

1992年4月に埼玉県南部と東京近辺を中心にTAAAは発足した。当時、南アのANC東京事務所をボランティアとして手伝ったことをきっかけに、南アのリーダーの要請に応じて日本の英語の中古の教科書を識字の教室のテキストとして送る約束をしたのであった。

新聞報道などで全国からの支援を得るようになり、本の冊数も種類も送付先も拡大していった。寄付金だけで賄いきれない経費は、大阪商船三井船舶の港から港まで無料で輸送するという申し出と郵政省のボランティア貯金からの配分金を受けることで解決した。

1994年3月末、初めてTAAAから南アフリカの本の送付先を訪問した。

ジョハネスバーグ郊外の閑静な住宅地であるベノニ市にメソジスト教育団体(MEI)の代表ベントレイ氏の家はあった。ここから車で15分ほどのところにデベトンという黒人やインド系の人々が暮らす広大な地域がある。人口は40万と言われていたが、地方から都市部へ移住する人々でふくれ上がってきている。学校はここだけで40校あるがレンガ作りのものから壊れかけた粗末なプレハブや倉庫を利用したものまであって一様ではない。

訪ねた小学校には例えば、生徒数1,200人で図書が100冊くらいしかないか、あるいは全く本のない学校もあるという状態であった。家庭にも学校にもほとんど本がない、という状態の中で、大

勢の子どもたちが日々を過ごしていた。

メソジスト協会のベントレイ氏は「たくさん本を送ってもらい、デベトンの学校へ平等に配っているが、この地域だけでも子どもは7万人以上いて砂漠に水をまくようなものだ。いつか移動図書館を使って少ない本を有効に巡回して使用していればうれしい」と将来の夢を語っていた。

帰国後、たまたま友人からの情報で移動図書館車の陸車になったものを無料でもらいうけることが可能であることを知った。専門家に相談してみると、再整備して外国でまだ十分に使えるということであった。船会社は、格安にひきうけてくれるという。残る問題は南アへ入る時の輸入関税が200%という高額なものであるという点であった。調べてみると南アを含む近隣5か国の関税同盟があり、南アに関しては南アの通産大臣が関税免除許可の特例措置の権限を持っているということであった。経済会議に来日した通産大臣に面会し、これを得るのに成功し、その数か月後に残り4か国の承認を得ることもでき、無事に輸送の運びとなったのである。

南アの貿易港であり、砂糖キビの生産地を周囲に持つダーバン市のNGOである英語教育財団(ELET)に1台、もう1台はベノニ市のMEIに送った。ダーバンのELETの車は、多少の修理の後、元気よくダーバン市周辺の広域、数100kmを走り回り、大活躍を始めた。日本における移動図書館の個人貸出システムではなく、ELETでは彼らの通常の教員への授業の指導の講習会に使う教材やTAAAが送った本の学校への配付や学校単位の貸出しにこの車を使っている。ベノニ市のMEIに送った車はしばらくの間、白人住宅地域のベントレイ氏宅の前に保管されていたが、ボランティア



▲ダーバン郊外のアルテンヴィレ学校にて。(1996年)

ア貯金配分金とTAAAの資金によって建設したデベトン中等学校内のガレージ兼書庫に納まり、1996年11月に落成式を行い、1997年に少しずつ稼働の運びとなった。

落成式にはTAAAのスタッフと埼玉県立浦和図書館司書の古我貞夫氏が出席した。全校生徒がすばらしい歌声で喜びをあらわしてくれ、またハウテン州教育局のベノニ市担当官も出席、地元の建設業者やロータリークラブなども出席し、地元の新聞記者のインタビューを受けたり、と大きな期待と関心と歓迎の気持ちをひしひしと感じたのであった。

その後MEIは州の教育局の図書情報サービス部からの応援やほかのボランティアの司書たちの応援を得て少しずつ、学校単位の移動図書館を運行しはじめている。落成式の際にはガランとしていた建物内に高い書棚が並びかなりの本が入り貸出システムが整備されつつあった。まだ本が足りないため、数校を回るので精一杯であるが、おいおい後から送ったもう1台とともに40校を定期的に回る方向へと努力していた。

●行政が乗り出す

1997年11月に埼玉県熊谷図書館司書の北爪健一氏とともに南アを訪れた際、私たちはハウテン州の教育局を訪ね、図書情報サービス部の部長以下スタッフとMEIとTAAAで会議をもった。これまで、図書情報サービス部は、MEIへ人を送り、図書整備を援助してきたが、今後、彼らの教育プロジェクトの中に新しい試みとして学校を巡回する移動図書館の項目をつくり、予算を組み、十数か所で日本からの移動図書館を受け入れた活動を行っていくことが決定した。これは南ア始めて以来の新しい試みであり、現在南アが抱えている教育問題を解決する上で、大きな貢献をすることになるだろう、と部長のケラー氏は大変な張り切りようであった。TAAAとしてもこれは大変ありがたいことである。受け入れ先がNGOばかりでは運行費などが不足し、数が多くなってくると私たちの支援では追いつかなくなるからである。私たちが本と車を送る。南アのNGOと行政がこれを自主的に運行していく、という方向へ一歩踏み出したことが、今後の活動への見通しを明るくしている。

(のだ ちかこ：アジア・アフリカと共に歩む会)

[NDC9:015.5 BSH:1.自動車文庫 2.南アフリカ共和国]



1995年ソブ外相(左)とNGOの人たちとの
ミーティングにて、ドミサニ(中央)

ドミサニ・ノテイウエレカ氏を悼む
ノテイウエレカさんは1994年5月来日、上智大学等で3年間学び、南アへ帰国。今年3月始めに故郷ウンタタの近くで射殺され、一命を落とした。人違いにより誤って射られたとも言われているが、現在調査中である。前途を嘱望されていた彼が、これからという時に亡くなったのは実に残念としか言いようがない。36才であった。TAAAとの交流は深かった。浦和市で講演をしてもらったこともあった。暴力とは程遠い柔和な彼が凶弾に倒れるなどとはだれが想像しただろうか。

平成9年度(¥2944~¥1043)決算書

収入の部		
寄付金	1,129,745	個人からの寄付
物品販売	56,110	ルイボステイ・書籍の販売
講演料	30,000	
郵政省配分金	4,155,000	
埼玉県国際交流協会	50,000	
利息	3,658	郵便局、銀行
前年度繰越金	3,511,580	平成8年度より
計	8,936,093	
支出の部		
本輸送費	396,574	
通信費	284,694	電話、FAX、切手、はがき等
交通費	5,277	
講演費	2,770	講演会会場費
会議費	2,000	
印刷費	100,918	会報、案内の印刷、コピー
事務費	134,373	用紙、写真代、封筒代等
図書館車路経費	758,948	
現地活動援助費	2,240,000	
現地視察費	1,128,157	
雑費	37,213	
計	5,090,924	
差引残高	3,845,169	平成10年度へ繰越
上記の通り報告いたします。 平成10年3月25日	会計 会計監査	吉田妍子 浅見克則

お知らせ

☆1997年度の決算書を掲載いたします。残高の中から80~90万円を5月末に南アへ送金する予定です。

☆浦和市で使用していた移動図書館車を譲り受け、友人の地所に保管中です。先日、TAAAの人たちと駐車場を訪ね、ボランティア貯金やTAAAのラベルを貼ったり記念撮影をしたりしました。南アの関税免除許可が出しだい、送付します。宛先はハウテン州教育局です。

☆次回の会報は、作業などに参加している人たちのプロフィールや活動中の写真などを紹介します。

☆英語の本や教科書は常時、募集しています。寄付金も活動源として必要不可欠なものです。常に大歓迎しております。

☆手紙や現金は本とは別にお送り下さるようお願いいたします。

◆ルイボステイ(南ア産健康茶)を販売しています。1箱(80パック)2000円5箱より送料無料で(4箱以下は送料一律500円)。氏名、電話、住所をお知らせ下さい。ご注文後、お茶と一緒に振込み用紙をお送りいたします。

◆会報がご不要の方は電話、Fax、ハガキなどでご一報下さい。

自由南アフリカの声 第17号 1998年5月20日発行
 新所 アジア・アフリカと共に歩む会
 〒338-0012埼玉県与野市大戸5-17-1 野田方 ☎048-832-8271 Fax048-832-3607
 郵便番号:「アジア・アフリカと共に歩む会」00100-4-608515
 新人 野田千香子 編集人 久我祐子